

村上春樹「沈黙」における現在性

——饒舌、「沈黙」の暴力

山田 夏樹

「僕は大沢さんに向って、これまでに喧嘩をして誰かを殴ったことはありませんか、と訊ねてみた」という一文より始まる村上春樹「沈黙」は、全集『村上春樹全作品 1979～1989 ⑤ 短篇集Ⅱ』（講談社、一九九一・一）に書き下ろしの形で収録され、高校二、三年生向けの集団読書テキスト（第2期B112）としても刊行（『沈黙』全国学校図書館協議会、一九九三・一）された。その後、修正され『レキシントンの幽霊』（文芸春秋、一九九六・一一）に、また、別の形で修正され『はじめての文学・村上春樹』（文芸春秋、二〇〇六・一二）にも収録された。本稿は初出に拠る。

まず「沈黙」の概要について述べていきたい。冒頭の引用は、飛行場の待ち時間に、中学生の頃よりボクシングを続けていることを、仕事仲間の「大沢さん」から聞かされた際の「僕」の反応であり、それは「たいして意味のない」「ほんのちょっととした好奇心」による「質問」であったことが引用の直ぐ後に「僕」の内面として明かされるのであるが、しかしこれ以降、本作は、「大沢さん」の直接話法による返答が大部を占めることとなる。ここでは、私立の中高一貫校に通っていた「大沢さん」が、中学二年時に同級生「青木」を殴ったこと、そしてその復讐のように、高校三年の夏、「青木」によってあらぬ「噂」をたてられ、結果として二学期か

ら卒業までの半年間、集団から無視をされ学校内で孤立する「地獄のような状況」に陥ることとなった体験について語られていく。

集団読書テキストとして刊行されていること、また集団からの疎外という、いじめに関わる問題性を描いていることもあり、授業実践も含め、本作を教育的な枠組みで捉えるものも多い。例えば村上春樹は「故のないじめにあって、孤立して一人でじっとそれに耐える男の子の姿が描かれている。（略）僕にもそういう種類の経験がある、そういう精神のあり方に共感するところがある^{（注1）}」とし、別の機会でも「この話の語り手が体験したのと同じような心的状況を、僕自身一度ならず経験した（略）。僕としては、自分がそのときに感じた心情を少しでもリアルに、物語というかたちに換えてみたかったのだ。（略）この短編小説は僕の予想を超えて、多くの人に切実に読まれていくようだ。（略）同じような立場に置かれたことのある（そして今も置かれている）人々の心の支えに少しでもなってくれたら、僕としてはとても嬉しい」と述べている^{（注2）}。

額面通りにとれば、ここでは「大沢さん」のみが「語り手」とされており、疎外された「大沢さん」の立場に比重をおいて読むことが求められているかのようでもある。ただし本稿では、既に他の論考でも為されている

ように、「大沢さん」の語りだけでなく、その内容を再構成する「僕」の語りにも改めて注意することにより、そこに孕まれるそれぞれの暴力性——他者に安易にレッテルを貼ることの暴力性について検討し、その上で、そうした問題を描出していく本作が持ち得る現在性、具体的には、戦後から連綿として存在し続け、近年ますます顕著となっている、世界を一面化し、そこで二元論を発生させてしまうような価値観が蔓延するような状況において、本作がどのような機能を果たし、如何に有効性を持ち得るかということ明らかにしていきたい。

1 内実のない「深み」——安易なレッテルを貼ること

冒頭の引用に対し、「大沢さん」は「どうしてまたそんなことをお聞きになるんですか？」と問うが、「僕」は「とくに深い意味はありませんよ」と答える。「大沢さん」は「基本的には一度もありません」と返すものの、しかし「正直に言おうと」、中学二年、ボクシングを習い始めて直ぐの頃「一度だけ人を殴った」と翻し、その上で、ボクシングを始めた契機や魅力について語っていく。「大沢さん」は、「ボクシングを気に入った理由のひとつ」を、「そこに深みがあるから」とし、「それに比べたら殴ったり殴られたりなんて本当にどうでもいいこと」「深みを理解できていれば、人はたとえ負けたとしても、傷つきはしません」「大事なのはその深みを理解すること」と繰り返す。そこで語られる「深み」について馬場重行^(注3)は、先述の村上春樹の言説なども踏まえた上で次のように述べる。

(略)「深み」とは何か。ここにこの作品のポイントもある。この語の意味を「大沢さん」は具体的に説明していないが、読み手にはその内容が伝わるように

作品は語られている。常識や良識から見ると優等生に見える「青木」のようなタイプの人間の、底の浅い実像を見抜く眼力。「深み」とは、例えばそうした類の洞察力に通じるものの捉え方であり、対象の足元に広がる世界を透視し、その特性を冷静なまなざしで認識する力である。これを共有するところに、この作品を読む意義がある。

ただし、ここでむしろ注意したいのは、「この語の意味を「大沢さん」は具体的に説明していない」という箇所であり、つまり「深み」という概念の内実についてである。例えば、しばしば為される村上春樹作品への批判、具体的には渡部直己^(注4)による、「この作家が、作中にしかるべき核心的な謎を導入しながらその周囲のきわめて些細な事物への注視を組織するとき、前者は一貫した黙説法のもとへおかれ、後者の表情がひたすら丹念に綴られつづける」、「決定的な何か」の「周到な拒絶」、といった批判があるが、「大沢さん」による「深み」も、その内実はいはより明確に語られず、抽象的なものとなっている。他の村上春樹作品についてはまた別に検討が必要であろうが、本稿でまず考察したいのは、そもそも「沈黙」という作品において、「大沢さん」の語る「深み」は特権的なものとして描かれているのかということである。馬場重行のように「その内容が伝わるように作品は語られている」とすることは、一見、渡部直己の批判に抗するもののようにあるが、そのように「青木」を「底の浅い」存在とし、「大沢さん」の語る「深み」に内実を認めていく場合、「大沢さん」／「青木」という構図、つまり人間としての優劣、序列が生まれることとなる。ただしこれより見ていくように、本作は、そうした序列を生むあり方、具体的には、他者を一面的に評価し、安易にレッテルを貼り、そこで二元論を生み出し

てしまうようなあり方の問題性自体を浮彫にし、描出するものとなっている。

予め述べれば、「大沢さん」の語る「深み」に内実などは存在しない。そもそもこの言葉自体が、「僕」の「とくに深い意味はありませんよ」（傍線引用者、以下同）という発言を受けてのものとなっている。もちろん「大沢さん」がどこまで意識的であったかは不明であるが、ボクシングをしていると知った瞬間、「これまでに喧嘩をして誰かを殴ったことはありますか」と聞き、その質問に「深い意味」はないとする「僕」の態度に対し、結果として批判的に応ずるものとなっている。「大沢さん」の印象とボクシングが結びつかなかったがために、「ふとそんな質問をしてしまったのだ」「ふとそう訊ねてみたのだ」と「僕」は再構成の語りの段階において弁明を繰り返すが、しかしそれがボクシングを始めた契機については「おそらくは余計な質問」であったと「僕」自身認めているように、ここでの質問は、ボクシングから即座に「喧嘩をして誰かを殴」ることを連想するという、ステレオタイプなものではない。そして、そうしたボクシングに対して為される「深い意味」のない安易なレッテル貼りに対し、「大沢さん」はボクシングには「深みがある」と突き返すのである。このように確認すると、「大沢さん」の語る「深み」には一見内実が伴っているかのようであるが、しかし実際には、両者には非常に似通った点があり、表裏の存在に過ぎないことが徐々に明らかとなる。次は、ボクシングをしていると聞く以前の「大沢さん」に対する「僕」の評価である。

（略）大沢さんはどう考えても二十年近くもボクシングを続けるような人柄には見えなかったからだ。彼は物静かで、あまりでしゃばらない人間だった。仕事ぶりはあくまで誠実で、誰かに何かを無理に押しつけるというようなことは一度としてなかった。どんなに忙しいときでも声を荒らげたり、眉を吊り上げたりすることはなかった。他人のわるぐちを言ったり、愚痴をこぼしたりするのを耳にしたことは一度もなかった。彼は言うなれば人が好感を抱かざるをえない人間だった。

一定の期間を経て構築された評価、「人が好感を抱かざるをえない人間」という、言わば〈善人〉という評価が、ボクシングをしていると聞くや否や、「喧嘩をして誰かを殴」るといふ、言わば〈悪人〉としての評価に反転する極端なあり方。しかし、こうした短絡は作中の「僕」に限ったことではなく、本作発表から現在に至るまで、徐々にインターネット空間などが浸透する過程で、より顕著になっているものと言え、例えばそれは、近年しばしば指摘されるようなコミュニケーションの〈キャラ〉化といった現象にも見出すことができる。自身の固有性への信仰を失った個人個人が、代替として「キャラ」を演じ、類型化された振舞いを続けることと、コミュニケーション偏重主義などをもたらすインターネット空間の浸透は連動しており、そのようなインターネット空間において「情報としてのわたし」が収集され、それが先回りして自身に「再帰的」に振舞いを迫る状況において、そしてそこで自身が引き受けた、または振り当てられた〈キャラ〉を互いに確認しながら演じ続けなければならないような「再帰的コミュニケーション」が顕著となっていく状況において、〈キャラ〉から外れた振舞いをするのは居場所を失うことを意味する。^{（注7）}そうした状況を体現する

かのように、「大沢さん」に貼られていた「好感を抱かざるをえない」〈善人〉というレッテルも、それとは結びつかないボクシングという情報を導入されるや否や、実際には「喧嘩をして誰かを殴」るような〈悪人〉というレッテルに、貼り替えたくなくなるような欲望をもたらしてしまうのである。

そして、こうした「僕」を一見批判するかのような「大沢さん」も、先述のように同様の問題性を抱えている。「大沢さん」は、中学二年時に殴った同級生「青木」について「浅薄」「自分っていうものがない」「他人に對してこれだけは訴えたいっていうものが何もない」「自分が認められれば、それだけで満足」「そういう自分の才覚にうっとりしている」「風向きひとつでただくると回っているだけ」などと語る。つまり、ここでもやはり自身の語る「深み」に對応するもののように、その「浅薄」さが強調されるが、しかし注意しなければならないのは、それが「こんな奴は殴られて当然」「この男は害虫のような人間」と、言わば〈悪人〉という評価にまで直結していくことである。「青木」が一方で、「多くの級友」からは「公正で謙虚で親切な人間」、「感心」すべき「頭のいいいたした男」という、言わば〈善人〉という評価を得ていることは認識しているのであるが、それを反転させるように「害虫のような人間」という、〈悪人〉と断定していくあり方とは何か。

まず注目したいのは、「大沢さん」によれば、他人に認められることに満足し、そのように振舞える「自分の才覚にうっとりしている」という「青木」のあり方が、まさにコミュニケーションが〈キャラ〉化した状況自体を体現するものようになってきていることである。つまり、自身が引き受けた〈キャラ〉に相応しい振舞いをその場にに応じて演じられるという「青木」を、「浅薄」で「実」がないと批判するが、繰り返すように問題であるのは、

それが〈悪人〉という評価にまで直結していくことである。「僕」は「大沢さん」に「人が好感を抱かざるをえない」〈善人〉とレッテルを貼り、実際にはそれに相応しくない要素があると判断すると〈悪人〉というレッテルに貼り替えたくなくなる欲望に駆られるわけであるが、「大沢さん」も、「多くの級友」にとって〈善人〉とレッテルを貼られている「青木」に對し、実際にはそうではないという見立てをしていくことで、〈悪人〉というレッテルにまで貼り替えようとする。つまり、「大沢さん」による「青木」批判は、一見、コミュニケーションが〈キャラ〉化した状況自体への批判のようでありながら、〈善人〉というレッテルに相応しくないということが、〈悪人〉というレッテルにまで反転してしまうことに窺えるように、「僕」と同様に、やはりそうした状況の枠内にあるものに他ならず、言い換えれば、単に「青木」に貼られた〈善人〉というレッテルを剥がそうとする行為に過ぎないことがわかる。もちろん直接的には、中学二年時に自身が「試験でカンニング」をしたという「噂」を「青木」が広めていると聞かされたことにも因るが、「多くの級友」が「青木」を称賛する度に「ひどく不快な気分になった」とあるように、「もともと」「青木」を「嫌い」な「大沢さん」は、〈善人〉というレッテル自体にも違和感を抱き続けており、そしてそうした評価に相応しくない存在とすることが、結果的に〈悪人〉という評価にまで直結していく。〈善人〉／〈悪人〉という評価は容易に反転しかねないものであり、「僕」と同様、一面的なレッテルを貼るものとして機能してしまう「大沢さん」の語る「深み」にも慎重にならざるを得ないということが、「大沢さん」自身から窺い知れるのである。

2 自身を投影する語り——「わかっているのはおそらく僕だけ」

以上のように確認した上で、次に「青木と僕とはあらゆる意味で対照的な立場にいました」と語るものの、実際には、やはり両者が非常に似通っているということ、より適切に言えば、「大沢さん」が、無意識に自身を投影しながら、「青木」について語っていることを検証していきたい。中学二年時、「試験でひとつでも一番を取れば」欲しいものを買ってもらえるという約束を両親と交わした「大沢さん」は、「とにかく英語で一番を取ってやろう」とし、結果的に一番となる。しかしそれが「英語の試験に関してはずっと一番を続けていた」「青木」の恨みを買ひ、カンニングをしたという「噂」を広められ、その話を聞かされた「大沢さん」は「頭に来」て殴ってしまう。「青木」については「大沢さん」による語りから判断する他ないが、しかし「対照的」と述べつつも、語れば語るほど、「青木」は「大沢さん」自身と表裏を成す人物像となっていく。どの科目でも構わないにも拘らず、何故か「青木」が「ずっと一番を続けていた」英語で「とにかく」「一番」を目指す点にも既に対抗心が窺えるが、加えて、自身が引き受けた〈ヘキャラ〉に相応しい振舞いをその場にに応じて演じられるという「青木」のあり方を、「わかっているのはおそらく僕だけ」とまで語るのは何を意味するのか。一方「大沢さん」は、自身を「目立たない人間」、「そういうタイプ」とするが、ただし「本だって僕くらい沢山読んでいた人間は他にいない」とも語り、他にもボクシングなど「自身の世界」を持っていたという主張もする。

僕はある意味では早熟な人間でもありました。だから同級生とつきあうよりは、

一人で本を読んだり、父親の持っていたクラシック音楽のレコードを聴いたり、ボクシング・ジムに通って年上の人たちの話を聞いたりしている方が好きでした。(略)だから僕もあまり自分というものを表に出さないようにつとめていました。

ここでは、あえて学校や同級生に背を向けていたとされており、だからこそ「僕も若かったし、自分ではうまく隠しているつもりでも、たぶんそういうのを自然に鼻にかけて、他人を見下しているようなところがあった」とも語る。前提には、「入ったときから好きじゃなかった」という、学校的価値観への意識的なあり方があり、それを「見下し」背を向け、一方で「ジムで会う人たち」からは「本当にいろんなことを学びました」とするが、具体的に何を学んだのか語られることはやはりなく、「深み」と同様、そこに内実は存在しない。こうした姿勢は、「〈学校の世界〉を否定しながらも、大沢自身けっしてそこから切断されることを望んでいない様子が明らか^(注8)」とも評されるように、私立の中高一貫校に通うなど経済的に恵まれた環境に支えられた上でのニヒリズムに過ぎず、むしろそうした価値観に囚われているあり方が顕著である。学校的価値観を強く意識しているからこそ、そこで、あえて「自分というものを表に出さないようにつとめ」、「目立たない人間」という「タイプ」として振舞おうとする。「大沢さん」はそのことに無自覚ではあるものの、まさにそうしたコミュニケーション状況の中で〈ヘキャラ〉を演じていると言え、そのため「青木」も同様に——自身とは対照的な「タイプ」であるもの——「スター」「オペニオン・リーダー」を演じており、またそのように振舞える「才覚にうっとりしている」に相違ないと見なされていくこととなる。「青木」が「体から発散

するエゴとプライドの臭い」を「とてもたくみに消し去って」たということが「わかっているのはおそらく僕だけ」という論理も、「自分というものを表に出さないようにつとめていました」、「自分ではうまく隠しているつもりでも、たぶんそういうのを自然に鼻にかけて、他人を見下しているようなところがあった」、「そういう無言の自負心のようなものが青木を刺激した」という自己分析が、投影されたものに他ならない。このように、「青木」が実際にどのような姿勢であったかは不明であるにも拘らず、自身の身の処し方を前提とするように評することで、やはり「青木」も言わば〈キャラ〉を演じている存在と位置付けられていくのであり、更には先述のように、実際にはその振舞いに相応しくない〈悪人〉とまでされていくこととなる。

どれだけ言葉を尽くしても、「青木」がどのように考えていたのかの証明にはなりえず、むしろ語れば語るほど、実際には「大沢さん」自身が学制的価値観に囚われている方が示されることとなり、そうした評価軸を前提として語られる以上、両者は「オピニオン・リーダー」か「目立たない人間」とかという「タイプ」の差異、言い換えれば、染まるか背を向けるかという意味において、表裏の存在としかならない。両者は似通っているのではなく、あくまでも「大沢さん」が自身を投影しながら、「青木」について語っているに過ぎず、「害虫」である「青木」を殴った後、「嫌な臭いのする虫を呑み込んでしまったような気分」となるのは、「大沢さん」の考える「青木」像が、実際には自身に還ってくるものであり、元々自身の内部に巣食うものであるからに他ならない。

3 未消化な語り——未だに「青木」を殴り続けていること

このように確認していくと、次のような指摘にも注意が必要となる。

「略」「」によってくくられている「大沢さん」の語りは、(略)あたかも語り慣れているかのように整理が行き届いており、入念に編集されたかのような印象を受けます(略)。「僕は本当はこの話をしたくないんです」と言うからにはおそらく、「僕」に対して初めて自分の過去を打ち明けているのでしようが、その「大沢さん」の体験というノン・フィクションは、いつか語られることを前提に、「大沢さん」の中でずっと手入れされ、物語化されてきたかのようです。(注10)

しかし「大沢さん」の中高時代についての語りは、そこまで都合よく「物語化」されているだろうか。見てきたように、語れば語るほど自身の問題性を表出させ、しかもそのことに無自覚なあり方は、むしろ未だ過去に囚われ続け「物語化」しきれない要素を窺わせるものとなっており、そうした語りに疑念を示すのが「僕」である。次は本作末尾である。

僕はそのまま続きを待っていたのだけれど、話はそこで終わった。大沢さんはテーブルの上で両手を組んで、ただじっと黙っていた。／「まだ時間は早いけれど、ビールでも飲みませんか」と少しあとで彼は言った。飲みましよう、と僕は言った。たしかにビールが飲みたいような気分だった。

(注11)
岡田康介は、「大沢さん」が高校時代に「ジムで会う人たち」と練習後にビールで交流を深めていたことから、「ボクシング仲間たちとの深い信頼関係」をあらわすものとしてビールがあるとし、その上で、話が終わっ

た後に飲み物がコーヒーからビールに変わることを、両者が「体験談を共有」し「仕事仲間を越えた間柄に深まっていく過程」をあらわすとする。

しかし実際には「大沢さん」の語りに「僕」は懐疑的な態度を示している。既に岡田豊が詳細に論じているように、「青木」への憎悪を隠さずに「害虫」などと悪し様に語る「大沢さん」の語りに対しては、視線と意識をそらすように「僕」は窓外のボーイング737を見るのであり、また「大沢さん」が未だに悪夢にうなされ妻にしがみつき泣く夜もあると語った後に窓外を見た際には、雲が「蓋のように重く、空にかぶさ」り「管制塔も飛行機も輸送車両もトラップも作業服を着た人々も、そんな雲の影にあらゆる色というものを吸い取られてしまった」と「僕」は語ることで「大沢さん」の心理を比喩的に表し、未だに「出口の見えない状況から脱し切れていない」あり方を示す。そのため、本作末尾の「そのまま続きを待っていた」という語りには、「話」がそこで終わってしまうことへの批判が込められているとされる。もちろん当初は、「深い意味」のない質問をした「僕」を批判するかのようになり、「大沢さん」の体験談は語り始められている。しかし、そうした質問は「おそらくは余計な質問」と内省され、また「大沢さん」の「話」に対しても懐疑的な態度が示されるなど、「大沢さん」との体験を再構成する「僕」の語りからは、他者を一面的に捉えること自体の問題性が浮彫にされていくこととなる。

そのことを検証していくため、次に再び「大沢さん」の語りへと、未だに「出口の見えない状況」に陥っている方について見ていきたい。飛行場での「大沢さん」とのやり取りを再構成する「僕」の語りの現在がどの時点にあるのかは不明であるが、過去を語るといふ点では「大沢さん」の語りと同様である。しかし異なるのは、「僕」が飛行場での質問を内省す

る姿勢を見せるのに対し、「大沢さん」がほとんど中高時代の自身の視点を対象化、相対化する姿勢を見せないことにある。あるのは「僕も若かった」、「まだ中学生です、そこまではクールになれません」といった弁明に過ぎず、当時の価値観自体を否定するものは存在しない。もちろん記憶は常に再構成されるものであり、当時の価値観を推し量ることなど不毛であるが、「大沢さん」の語りは、過去と現在に隔たりが存在しないもののように為されていく。そのことをまず窺わせるのが、高校三年の夏休みに「もう学校には行きたくない」という言葉を残して自殺した「松本」についての語りである。

死んだ級友のことは気の毒だと思いました。何もそんなひどい死に方をする
ことはないのです。学校が嫌なら、学校になんて来なければいいのです。そ
れにあと半年もすれば嫌でも学校を出ていかなくてもはならないんです。な
にどうしてわざわざ死ななくてはいけないんですか。僕にはよく理解できま
せんでした。たぶん何かのノイローゼだったんだろうと僕は思いました。明
けても暮れても受験の話しか出ないんですから、頭がおかしくなる人間が一
人くらい出てきたとしても、とくに不思議はありません。

その後、「松本」が誰かから殴られるなどの「いじめ」を受けていたという話が出回り、それを利用して中学二年時の復讐のように「青木」があらぬ「噂」をたてたことで、「大沢さん」は疑惑をかけられ、結果的に学校で孤立し「地獄のような状況」に陥ったとされるのであるが、注意すべきは、それでも「大沢さん」の「松本」に対する印象に変化が見られないことである。もちろん先の引用は、当時の「大沢さん」の心境として語られているが、「松本」の自殺後、自身も学校で「地獄のような状況」に陥

の後に聞いているにも拘らず、「学校が嫌なら、学校になんて来なければいい」という理屈から更新されることがないのであり、自身のように「深み」との関わりを持ち得ずに、学校的価値観に囚われるように自殺したという見立てに押し込み続けてしまう。それは「青木」と同様に「見下し」の対象としかならないのであり、そのような視点は、「明けても暮れても受験の話しか出ない」という競争の原理と同様のものに他ならないが、そもそも学校をそうした場としてのみ捉えること自体に、囚われた一面的なあり方が強くあらわれている。また「本当に怖いと思うのは、青木のような人間の話を無批判に（略）信じてしまう連中」、「自分が何か間違ったことをしている（略）なんて（略）考えたりしない」、「真夜中に夢をみるのもそういう連中」とするが、中学二年時、「青木」が「噂を広めているという」話を人づてに聞き、「頭に来」て殴る「大沢さん」も「噂」を信じる存在に他ならず、更に「松本」を少しも慮らずに「見下し」続けるあり方なども、同様に「夢の中に出てくる」「顔というものを持たない」存在になり得る危険性を孕むものである。

ここまで見てきたコミュニケーションのあり方や競争の原理などは、当然、卒業後の社会とも切り離せるものではないが、三一歳の現在、そうした世界に身を置きながらも、「大沢さん」は未だに全ての要因を、中高時代に還元し拘泥することで、「夢」に象徴されるように怯え続けることとなっている。高校三年時の「青木」を、中学二年時と「ほとんど何もかわっていない」とし、「ある種の人間というのは成長も後退もしない」と見なす「大沢さん」自身は、現在に至るも「ほとんど何もかわって」いない。現在もボクシングを続けていることは、裏を返せば、電車での体験がその場限りでの勝利に過ぎず、再び陥れられ「負け」ることを恐れるあまり、

その後も序列を構築する手段として、あたかも自己防衛のために行わざるを得なくなっている状態を窺わせるものとなっている。「大沢さん」はこれらのことに無自覚であるが、言うなれば未だに心の中で「青木」を殴り続けているのであり、だからこそ「喧嘩をして誰かを殴ったことはありますか」という「僕」の質問に過剰に反応し自己を正当化する「話」を饒舌に展開してしまふ。そしてそこでの、「深み」と「浅薄」さを対比する語りは、序列を明確にし、自らを正当化しているという点において、一見、明快な「物語化」が為されているかのようにもあるが、しかしそれは、あくまでも自身にとって都合の良い世界でしかない。つまり「大沢さん」が否定的に語る要素が、全て自身に還ってきてしまうことなどは、世界や他者がそのように一面的に捉えられるものではないということを逆説的に証明することとなり、それは聞き手としての「僕」の態度にも示されるように、結果的に様々な疑問を想起させるものとなっていく。

4 「沈黙」の危険性——自身への還元の困難

このように他者を一面的に捉えるあり方は、確認した現在のコミュニケーションの〈キャラ〉化の状況などに限定されることなく、近年ますます顕著となっている。それは、流動的でグローバル化した時代、流動的なメディア環境に耐えかねるように排外的に「壁」を作ってしまう現在のあり方に象徴的^(注13)と見え、また二〇〇一年の同時多発テロ以降の世界内戦状態とも呼ばれる状況や、二〇一一年の東日本大震災以降に顕在化した戦後日本が抱え続ける〈壁〉の存在にも見て取れる。例えばそれはインターネット上などに溢れる、自身にとって都合が良く、一面的にしか世界を見ない者同士の衝突に顕著であるが、木村朗子^(注14)は、震災後、拡散している「東

北支援か否か」「脱原発か推進か」といった安易な二元論と、またそれと表裏のものとしての多くの作家の沈黙のあり方を、震災自体ではなく、「戦後に長い時間をかけて築かれた言論の壁」にあるとする。またそのような〈壁〉、言い換えれば一面的な価値観の蔓延を田中和生は、戦後から現在に至るまで機能し続ける「共同幻想」（吉本隆明『共同幻想論』河出書房新社、一九六八・一二）にあるとし、その根底に、原子力発電の「安全神話」などに象徴される、「豊かさ」を最優先するため第二次大戦の戦死者から被災者や原発作業員などを「都合の悪い同胞」とした上で、そうした存在を「切り捨て」ることを「仕方ない」とする意識があるとする。^(注16)

そのような状況において、「本当に怖いと思うのは、青木のような人間の話（略）そのまま信じてしまう連中」という、「大沢さん」自身に還ってくる言葉を一見乗り越える「僕」のあり方、そして同時に、そこで「沈黙」に留まりもする「僕」のあり方には、現在にまで射程の及ぶ本作の重要な問題性が示されている。当初、一面的でステレオタイプな質問をした「僕」は、それを内省する姿勢も含め、「沈黙」を守れずに饒舌に展開される「大沢さん」の一面的で、過去の自身の視点をほとんど対象化しない「話」を、「そのまま信じ」るのではなく、「沈黙」とともに懐疑的な態度を示すのであり、それ自体にはひとまず一定の意義を見出すことができるだろう。しかし注意すべきは、震災以後の状況や、また集団による「大沢さん」の無視などにも窺えるように、事態に対し単に「沈黙」を守ることも、結局は「壁」に屈するものに過ぎないということである。言い換えれば「僕」は懐疑的な態度に留まってしまっている。それは「大沢さん」の危険性にごとまで気づいているのかという問題となるのであり、同時にそれは、「大沢さん」の「話」を通すことで、「僕」が自身の危険性にごとまで気づき、

どこまで向き合えているのかという問題にも連なっていく。興味深いのは、「大沢さん」の語る「青木」像が、「大沢さん」自身が抱える危険性を体现するという構造、言い換えれば、他者を通して自身が浮彫になるという構造になっているのにも拘らず、「大沢さん」が無自覚であるのと同様、まさにそうした他者である「大沢さん」の姿を通して、「僕」は自身が有する危険性を明確に見出すには至っていないことである。つまり本作が重要なのは、単に他者を一面的に捉えていくことの危険性が描出されているということにあるのではなく、そのような似姿を通して、「僕」の「沈黙」に象徴されるように、それを自身に容易には還元することができないあり方が描出されていることにあり、それは、安易にレッテルを貼り合うことやコミュニケーションの〈キャラ〉化なども含め、ほとんど揶揄されているとも言える現在のあり方が、実際には想像以上に根深い問題としてある——戦後から現在に至るまで存在する〈壁〉——ということを浮彫にすることとなっている。末尾のビルは、「大沢さん」にとっては高校時代から続けるボクシングと同様のもの——怯えからの自己防衛——に過ぎず、「僕」にとっては「沈黙」に留まるあり方を示すものでしかない。そのように互いに他者を見ないあり方、「僕」の質問に過剰に反応する「大沢さん」の饒舌と、結果的に「僕」が陥る「沈黙」という構図を通すことで、改めて読み手が自身に何を還元させ、世界をどのように捉えていくのかということ突きつけてくる点にこそ、本作の現在性があると言えるのである。

注

(1) 村上春樹「解題」『村上春樹全作品 1990～2000』③ 短篇集Ⅱ 講談社、二〇〇三・三三。

- (2) 村上春樹「かえるくんのいる場所」(『はじめての文学・村上春樹』文芸春秋、二〇〇六・一二)。
- (3) 馬場重行「村上春樹「沈黙」論——「深み」の共有へ」(馬場重行・佐野正俊編著『〈教室〉の中の村上春樹』ひつじ書房、二〇一一・八)。
- (4) 渡部直己『不敬文学論序説』(ちくま学芸文庫、二〇〇六・二)。初刊は、太田出版、一九九九・七)。
- (5) 斎藤環『キャラクター精神分析——マンガ・文学・日本人』(筑摩書房、二〇一一・三)。
- (6) 水野博介『ポストモダンのメディア論——過渡期のハイブリッド・メディアアと文化』(学文社、二〇一四・三)。
- (7) 注(5)に同じ。
- (8) 尾形大「村上春樹「沈黙」を読む(一)——高等学校国語科教材としての一視点」(『教育・研究』二〇一二・三)。
- (9) 岡田豊「村上春樹「沈黙」に関する一考察——大沢の〈沈黙〉／「僕」の〈沈黙〉」(『駒沢国文』二〇〇六・二)、深津謙一郎「村上春樹「沈黙」論——内なる〈他者〉への想像力」(『文芸研究』二〇一五・三)は、「青木」と「大沢さん」に共通するプライドの高さが、互いを刺激し合ったとするが、「青木」については証明のしようがなく、また「大沢さん」自身が、プライドの高さを実際に周囲に発散していたという点も、本稿とは文脈が異なる。
- (10) 風丸良彦『村上春樹短篇再読』(みすず書房、二〇〇七・四)。
- (11) 岡田康介「〈再話〉される大沢／〈物語化〉する「僕」——村上春樹「沈黙」論」(『横浜国大語研究』二〇一四・三)。
- (12) 岡田豊(注9)に同じ。付け加えれば、ボーイング737については、その機種をすぐに判断する方から、「僕」が飛行機にある程度の関心のある人物と捉えられており、そのため、「青木」を批判した後「微笑」を向ける「大沢さん」から、自身の関心のある事柄に目をそらせたと指摘されている。
- (13) 藤田直哉『新世紀ゾンビ論——ゾンビとは、あなたであり、わたしである』(筑摩書房、二〇一七・三)は、そうした状況を象徴するものとして、「サプカルチャー領域などにおける近年のゾンビの流行を指摘し、その現象が、「過剰流動性それ自体を飼い慣らし、自らの一部を流動性の中に投げ入れたり、身にまとうことで現代に適応しようとする新しいライフスタイルの可能性を提示」し、一方で「そのような生き方には限界があることを告発する」両義的なものであるとしている。
- (14) 木村朗子『震災後文学論——あたらしい日本文学のために』(青土社、二〇一三・一一)。
- (15) 田中和生『震災後の日本で戦争を引きうける——吉本隆明『共同幻想論』を読み直す』(現代書館、二〇一七・二)。
- (16) 拙稿「川上弘美「神様2011」、竜田一人「いちえふ」、カトーコーキ『シンサイニート』が浮彫にする戦後日本の問題性——東日本大震災以降の文学、マンガの表象分析」(後藤隆基編者『3・11』後の表現を考える』立教大学日本学研究所、二〇一七・九)では、そのように一面化した状況の中で、隠蔽され塗りつぶされてしまうような問題性自体を浮彫にしている小説、マンガについて論じている。

(やまだ なつき 日本語日本文学料)